

二十三 『ヨーロッパ戦後史』——日本戦後史の合わせ鏡

今頃になって大岡昇平の『証言その時々』（講談社学術文庫）を手にした。三十五歳で補充兵として徴兵された人は、翌年フィリピンに送られて悪戦にさらされ、一九四五年の敗戦を俘虜収容所で知った。作品としては『野火』しか読んでいないわたしも、芸術院会員を辞退して文化勲章も避けたらしいことを知っている。戦争はこの人の骨の髄まで傷つけたので、広いジャンルの文学作品を書き続ける一方で、死ぬまでその時々に関連する文章を発表したのである。それらを読んで、よく整えられた作品とは違い、いわば身心の直接的な反応を表わしていると感じた。わたしは、現在この国で見られる現象は実質での衰微の表われだと思うので、同じような危機に身をさらした人の証言を聴くことが、事態に対処する道を教えてくれると期待して、この書物を読んだ。

『俘虜記』の抄録が、収容所で日本政府のポツダム宣言受諾の意向を知った八月十日に、大岡昇平が考えたことを教えてくれる。——では祖国は負けてしまったのだ。偉大であった明治の先人達の仕事を三代目が台無しにしてしまったのである。歴史に暗い私は文化の繁栄は国家のそれに随伴すると思っているが、あの狂人共がもういない日本ではすべてが

合理的に、望めれば民主的に行われるだろうが、我々は何事につけ、小さく小さくなるだろう。偉大、豪華、崇高等の形容詞は我々とは縁がなくなるだろう。……、しかし慌てるのはよそう。∴、明治十年代の偉人達は我々とは比較にならぬ低い文化水準の中で、刻苦して自己を鍛えていた。これから我々がそこへ戻るのに何の差支えがあろう——。涙を流しながらの三十六歳の感慨は、まだ危機の底にいないけれども、歳をくった老人の胸に広がる。日本が小さくなっていた敗戦前後から、歴史はもう一度ひとめぐりした。わたしは、少年の頃から人々が一所懸命に経済的に大きくなることを追求したのを見てきたが、だいぶ前に頂上を過ぎて下り坂にあり、足元を支える力が弱まったことに気づいている。表舞台で演じている今の三代目たちに本当の責任感はないように見える。敗戦後文化的に高められたのだとしても、この先もう一度水準が落ちるのを味わうことになる確率が高い。事態のゆるやかな進展は、老人にその時間を与えてはくれないだろうが、苦しい時代に対峙するには大岡昇平ほどの覚悟が要るだろう。

一九八六年までのそれらの証言は、戦後日本の歴史の展開の中で書かれたから、おのずとその時々の時代を反映している。しかし、過去になった歴史をふりかえる者は、その歴史の同時代人が感じたり考えたりしたことが必ずしも正確でなかったことを知る。進行中

の状況を適切に捉える高みに立つことはいつも難しい。したがって、平凡なわたしが今感じていることはピントはずれで、現実にはこれから起きることはわたしの想像を超えるだろう。このような感想を抱いたのは、トニー・ジャットという歴史家の『ヨーロッパ戦後史』（みすず書房）という書物を読んだあとだったからである。その書物を読む前には、「ヨーロッパ戦後史」が、日本でわたしの生きた時代をこれほどまでに解き明かしてくれるとは思っていなかった。われわれはずっと前からグローバルな世界に生きているのだ。

著者がこの著作を思い立ったのは、ベルリンの壁がこわされ東欧の体制が崩壊しつつあった一九八九年十二月、ウイーンの駅頭でのことだったという。どこよりもヨーロッパで大きく転回していた歴史を記述しようとする視線は、まず、その体制をもたらしただ二次世界大戦の硝煙の匂いがたちこめている場面へ向かう。現代が第二次世界大戦による廃墟を節目として始まったのは日本にもそのまま当てはまるから、かわりを増大した世界の中で、ヨーロッパ戦後史と日本戦後史が似た道をたどることは条件づけられていたのだと知る。歴史家は、そのなりゆきをもっと長い歴史の中に置いて跡づける。

まず、未曾有の戦争が遺したものがヨーロッパと日本で共通していることを知る。戦争の犯罪、国境問題など、今日まで尾を引いている問題を姑息に回避しないで対応すべきだ

と教えられる。日本だけが負い目を背負っているのではない。ドイツでも日本でも、国民の多くが戦争へ参加したのであり、戦時体制によつて植えつけられた意識が戦後まで残り、反省すべき出来事は多かれ少なかれあいまいにされたといえる。未来を切り開こうと思うなら、ヨーロッパの人々の身を切る対応から学ぶべき点があると思う。

ヨーロッパで実施された戦後改革・各種の保険を整備した福祉制度などが、戦後の社会体制の枠組みをつくつたのだが、巨視的に見れば、日本も同じ道を進んだことが分かる。大きな違いは、近接した西ヨーロッパが、近世以来の戦争を伴う対抗を終息させて、協力していくことを選んだことだろう。近代化の進展に差のあつた東アジアで、日本の侵略が残した傷跡に内戦が起きて不安定になつた周辺諸国と疎遠なまま、日本は政治的にも経済的にも一國で復興の道へ進まなければならなかつた。年月を経てようやく安定な関係を結べるようになった今、東アジア諸国は、協調の道を進むヨーロッパの選択を参照しなければならぬ。

二度目の東京オリンピック開催が決まつた日本で、新幹線や前回のオリンピックなど昔を懐かしみ、戦後復興を自己称賛的に語ることがはやっている。けれども、高度経済成長はヨーロッパでも同様だったことを知り、現在目の前にある困難にどう立ち向かうべきかを考えるべき時である。技術革新に支えられた戦後の経済成長が西ヨーロッパと日本で著

しかつたのは、モノとヒトとを組織する基盤が存在して、経済循環を進展させる条件がうまく働いたからである。後発国の労賃の安さや設備の新しさが有利に働いて、すでに発展していたアメリカに追いついていった。アメリカの経済規模の拡大は今も移民の流入に負うところがあるのだろうが、西ヨーロッパでは後進の地中海諸国からの出かせぎ労働者が生産の拡大を支えた。日本の経済拡大は、独仏英に二倍する人口規模が、農村から都市への人の移動によって労働力を供給し、同時に消費を拡大させたからである。そこで働いていた経済メカニズムは似ていたといえる。

経済の動きは早い。高度経済成長は一九七〇年代に終わり、先進諸国の経済は飽和状態に近づき、遅速はあったけれどもしだいに低成長の時代になった。アメリカに続き西ヨーロッパと日本も、有利な経済条件をほぼ使い尽くしたのである。アメリカのドル・金交換停止の宣言が一時代の終わりを告げた。日本がしばらく西ヨーロッパよりも良い状態に見えたのは、西ヨーロッパは出稼ぎ労働者を本国に引き上げさせたのに対し、日本では勢いが残っていて、人口が減らなかつたのも一因だろうか。

著者ジャットは「文化戦争」という章を立てて、文化面でも新しい事態が生じ、社会が変化したことを語る。西ヨーロッパと日本で形成された社会は、以前よりもずっと似たも

のに近づき、現在日本で見られる生活や行動様式や考え方の新しい多様さは、本質的に世界共通のものなのだ。ここでもわれわれは、西ヨーロッパを参照することができる。

『ヨーロッパ戦後史』は、一九八〇年代以後の歴史についても健筆をふるっている。現今のことをよく理解できていない者がこれ以上うんぬんするのは無益なので、感想を記して終わることにしよう。先進諸国が低成長時代に入ってから打開の方策がいろいろとられただけども、最も重要な状態変化は資本が国境を越えて自由に移動するようになったことである。自国の経済に空洞化が起きることを知りながら、先進諸国の資本は利潤を求めて海外への投資に向かった。大企業は今や多国籍企業となり、先進諸国の国民は企業の経済活動から前ほどおこぼれを受けられなくなった。冷戦の終結がグローバル化を完成させて、一九九〇年代からさらに金融資本が主役を演じる事態が進行している。新たに注目を集めているのは、投資される資本が滞留するところで、経済が最も拡大している国々である。問題は、グローバルなこの進展がこの先どうなっていくのか、日本に住んでいるわれわれはどういう影響を受けるかである。日本の三代目たちは方策を構想できず、政府の借金を重ねてやりくりすることしかできていないように見える。敗戦続きのその場しのぎに目を覆いたくなるわたしは、大岡昇平の危機感が決して無縁ではない、と思う。

ところで、著者トニー・ジャットは、リトアニアのラビ(ユダヤ教の師)の血を引くベルギー人の父とロシア移民の母とのあいだの子でロンドンに生まれ、ケンブリッジで学んでイギリスの大学で経歴を積み、最後はアメリカ合州国に移住して研究を続けたという。『ヨーロッパ戦後史』の記述で、合州国は強い影響力を行使したが部外者としてしか登場しない。けれども著者は、アメリカをよく知っている上で、ヨーロッパの隅々までの歴史を活写したのである。その生まれと経歴が、偏見のない広い視野で歴史を考えることを可能にしたのだと思う。ヨーロッパの未来志向の動向を記述するのにふさわしい人がその仕事を果たしたのだ。ひるがえって、アメリカとの軍事同盟とその下での経済的同調は目先のことで、本心において極東の島国に孤立しようとする日本人のあり方がこの開明からはるかに遠いことを、痛切に感じないわけにいかない。

同世代の人が知っていることを書きとめてもしかたがないが、文章に表現することは自分の考えたことを頭に入れておくためのよい方法だから、断片的すぎるけれどもメモにした。ことは自分の生きた時代の歴史でもあるから。

